

国立近現代建築資料館が所蔵する 菊竹清訓設計の日本政府建立戦没者慰霊碑の図面群について

戸田 穰*、加藤 直子**

On the Drawings of the War Memorials erected by the Japanese Government, designed by KIKUTAKE Kiyonori in NAMA Archives

TODA Jo, KATO Naoko

Since 1971, the Japanese government has erected 14 war memorials overseas. Eleven of these sites were designed by KIKUTAKE Kiyonori. NAMA (National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs), received the donation of these materials in 2019 through the kindness of the bereaved families. This report introduces this new collection.

キーワード：慰霊、菊竹清訓

1. はじめに

— 菊竹清訓と日本政府建立戦没者慰霊碑 —

文化庁国立近現代建築資料館（以下「建築資料館」）では、2013年開館当初より、「顕著に時代を画した建築家」にかかる収集対象資料として、建築家菊竹清訓（1928–2011）に関する建築資料の収集を進め、「菊竹清訓建築設計資料」としてアーカイブ化に取り組んでいる。平成26（2014）年10月には「建築のこころ アーカイブにみる菊竹清訓展」を開催した。令和元（2019）年には1960年代および慰霊碑関連の図面資料が収蔵され、現在は1970年代前半の図面資料および慰霊碑関連の文書資料等の資料調査を進めている。本稿ではこれらのうち、日本政府建立戦没者慰霊碑の図面群について、その概要と各慰霊碑ごとに資料の構成を紹介するものである。

日本政府は、昭和46（1971）年以降に硫黄島と海外14ヶ所に戦没者慰霊碑を建立した。谷口吉郎設計による最初期の3基と、横河建築設計事務所設計になる最近の《日本人死亡者慰霊碑》を除く11基を菊竹清訓が設計している（菊竹1990）。この事業では、碑＝モニュメントそのものだけでなく、メモリアル・パークとして敷地全体の整備も同時に計画された。ただし事業規模は大きくはなく、菊竹の仕事として必ずしも注目を集めてきたわけではない（遠藤他2017）。しかしこれらの施設は、厚生労働省による援護施策における二大事業——遺骨収集と現地への慰霊巡拝——の重要な拠点であり、また戦没者遺族と旧戦域現地の戦争犠牲者の交流の場としても機能している。建築家のキャリアにおいてだけでなく、国の歴史においても重要なモニュメントだといえるだろう。

2. 資料の構成

本資料は、フォンド「菊竹清訓建築設計資料」の一部であり一連の資料番号を付されている。寄贈時にはプラスチックの図面筒23本に収められており、これらの図面筒を一資料単位とみなしてフォンドの下位にファイルとして位置づけている（該当する資料番号は15-358～370, 15-373～376, 15-279, 15-405, 15-415～416, 15-447, 15-521）。整理作業においては、図面筒から資料を取り出し、中性紙保存箱に移してフラットニングした状態で保存した。その上で、一つ一つのアイテムの資料情報から目録を作成した。本資料を構成するのは、菊竹が設計した11基の慰霊碑のうち10基の図面群であり、総点数は355点である（表1）。

3. 各慰霊碑について

ここでは10基の慰霊碑資料群について竣工年順に紹介していく。

《南太平洋戦没者の碑》（1980年9月30日竣工）は、1979年7月1日の日付を中心としたふたつの図面群からなる（NAMA15-360, NAMA15-362）。特記仕様書から工事図、配筋図、伏図・軸組図など詳細図まで29点（内6点は重複する図面）が揃う（図1：NAMA15-360-20「伏図・軸組図 背筋詳細図」）。

《ビルマ平和記念の碑》（1981年3月28日竣工）は、ふたつのファイル計24点からなる（資料番号15-358～359）。日付については二つあり1979年2月21日の段階の図面においては「BRUMA PEACE MEMORIAL PARK」、1979年7月1日では「ビルマ戦没者慰霊碑」となる。中心となるのは後者の図面19点である。厚生労働省の説

*昭和女子大学 専任講師、博士（工学） **国立近現代建築資料館 研究補佐員、博士（学術）

表1 日本に送付された図面群

建立年	慰霊碑名	国・所在地	資料番号
1980	南太平洋戦没者の碑	パプアニューギニア独立国 東ニューブリテン州ラバウル市	15-360 15-362
1981	ビルマ平和記念の碑	ミャンマー連邦共和国 ヤンゴン市	15-358 15-359
1981	ニューギニア戦没者の碑	パプアニューギニア独立国 東セビック州ウエワク市	15-361 15-363
1982	ボルネオ戦没者の碑	マレーシア ラブアン市	15-365 15-366 15-367
1984	東太平洋戦没者の碑	マーシャル諸島共和国 マジュロ島マジュロ	15-368 15-369
1985	西太平洋戦没者の碑	パラオ共和国 ペリリュー州ペリリュー島	
1987	北太平洋戦没者の碑	アメリカ合衆国アラスカ州 アッツ島(アリユーション列島)	15-370 15-447
1994	第二次世界大戦慰霊碑	インドネシア共和国 パプア州ビアク島パライ	15-374 15-375
1994	インド平和記念碑	インド共和国マニプール州 インパール市ロクパチン	15-379 15-376
1995	日本人死亡者慰霊碑	ロシア連邦/Vバロフスク地方 Vバロフスク市	15-405 15-416
1996	樺太・千島戦没者慰霊碑	ロシア連邦 サハリン州(樺太) スミルナイフ	15-415 15-373
	戦没者慰霊碑	フィリピン クラーク地区	15-364 15-521

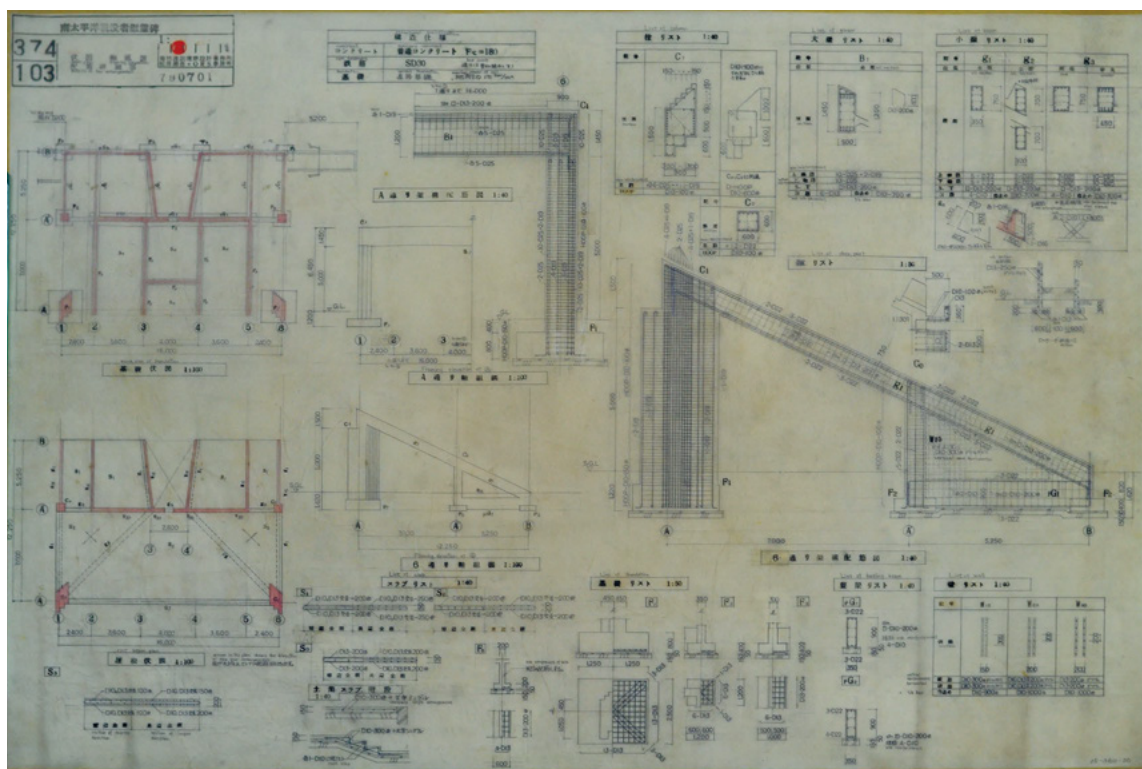


図1 NAMA15-360-20「伏図 軸組図 背筋詳細図」

明によれば、この事業においては、設計・施工はビルマ側のラングーン開発委員会が行い、菊竹清訓建築設計事務所は「協力」と位置づけられている。また、本慰霊碑ははじめ日本人墓地に建設されたが、のちにヤンゴン市により別の日本人墓地に移転されている。

《ニューギニア戦没者の碑》(1981年9月16日竣工)は、ふたつのファイル(資料番号15-361, 15-363)にまたがって計57点の資料からなる。資料番号15-363は、15-361の青焼きが主である。図面のほとんどは「PAPUA NEW GUINEA 戦没者慰霊碑(仮称)」のタイトルをもち11月6日、11月24日、12月19日の日付をもつ(図2: 15-361-1)。

これらは基本的に白焼きであるが、鉛筆書きの「WEWAK」〔ウエワク〕というタイトルの図面が5点あり、そのうちのひとつの日付は1980年11月24日となっている。これら鉛筆によるエスキスでは、竣工記念式典の座席配置の検討図があり、式典における光の効果を検討していることが伺える。また上述の図2とは、碑とプラザの位置関係に変化がみられる(図3: 15-363-26)。

《ボルネオ戦没者の碑》(1982年9月30日竣工)は三つのファイルからなる計22点(15-365～367)。最も古い日付は1981年3月25日で、当初は塔状の碑を計画していた。碑の意匠については複数の案が検討されたことが

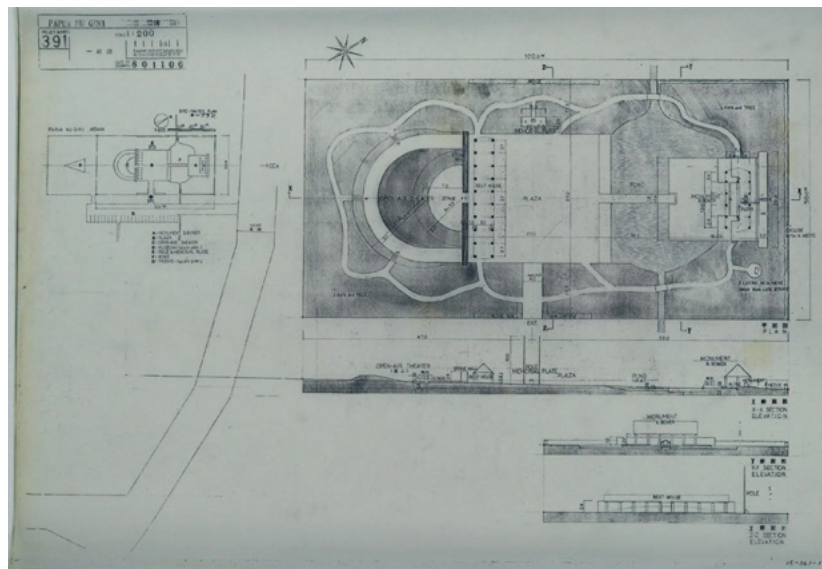


図2 15-361-1

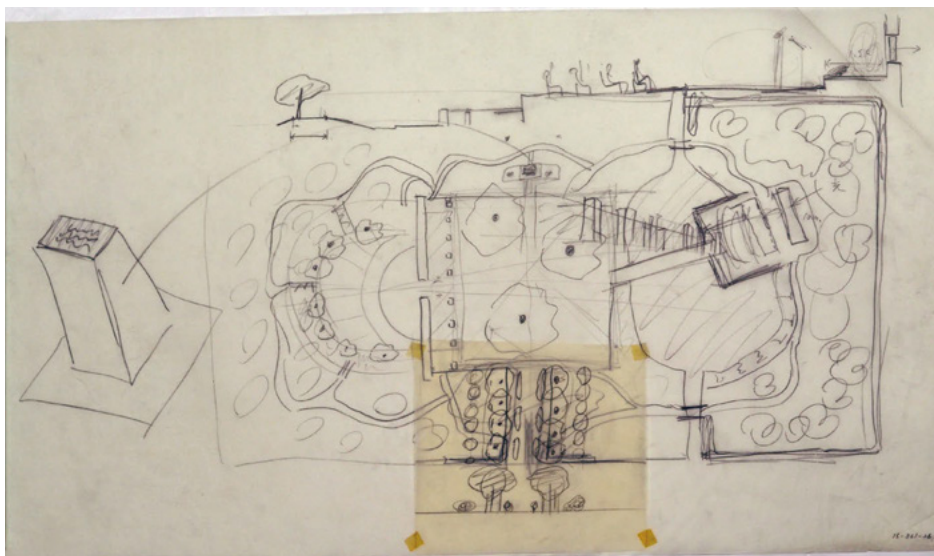


図3 15-363-26

わかるが、配置計画についても1983年9月14日付の実施案(図4: 15-365-3)以外に3案が図面として残されている。また竣工後の1983年9月20日から、この規模の公園からするとかなり立派な便所の設計案も複数残されている。慰霊碑と公園という計画の中では数少ない建物を設計する機会をとらえて意欲的に取り組んでいることが伺える。

《東太平洋戦没者の碑》(1974年3月16日竣工)はふたつのファイルからなる計55点(15-368~369)。エスキスの図面なども含み、戦没者慰霊碑資料の中でもヴァリエティに富むファイルとなっている。1983年5月25日に

A案(図5: 15-368-3)を経てから、同6月30日の実施案の配置図まで1か月で設計が進んだが、その後もさらに変更が重ねられて最終案に至ったことがわかる。

《北太平洋戦没者の碑》(1987年7月1日竣工)はふたつのファイル計16点の資料からなるが(15-370, 15-447)、資料番号15-447は尾川宏制作になる碑文原寸と題字のエスキスであり、図面資料は資料番号15-370の8点にすぎない。いずれも1987年5月30日の日付をもち特記仕様書1点と施工図面6点、原寸の変更図1点である。

さらに時代を下って、1990年代に実現した四つの計画については資料点数には多寡がある。ほぼ同じ時期

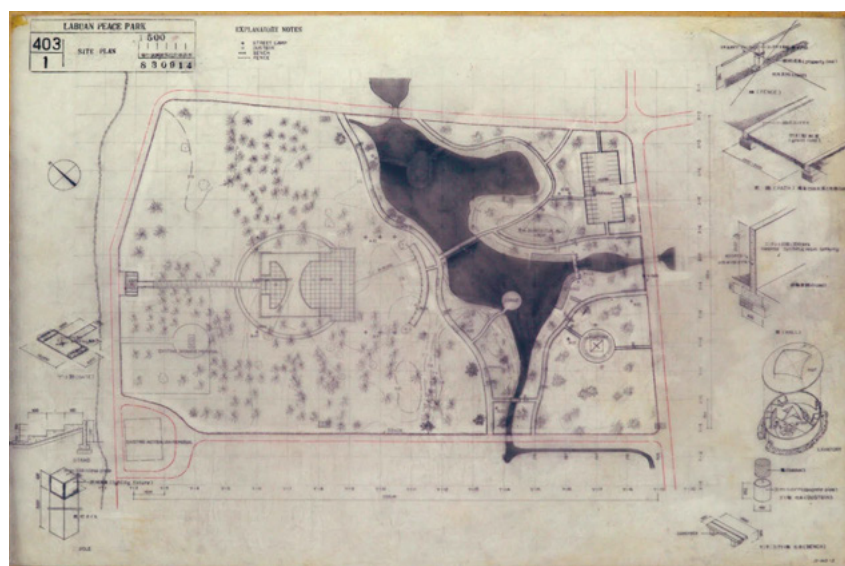


図4 15-365-3

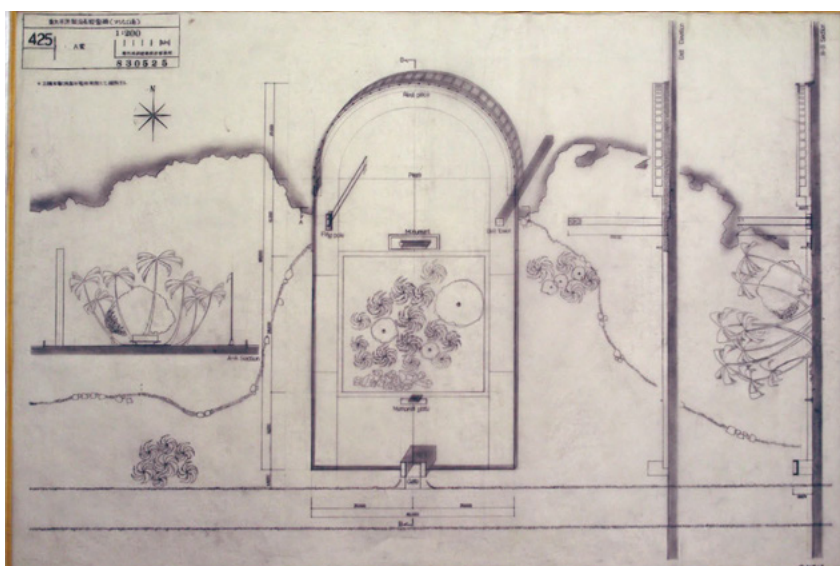


図5 15-368-3

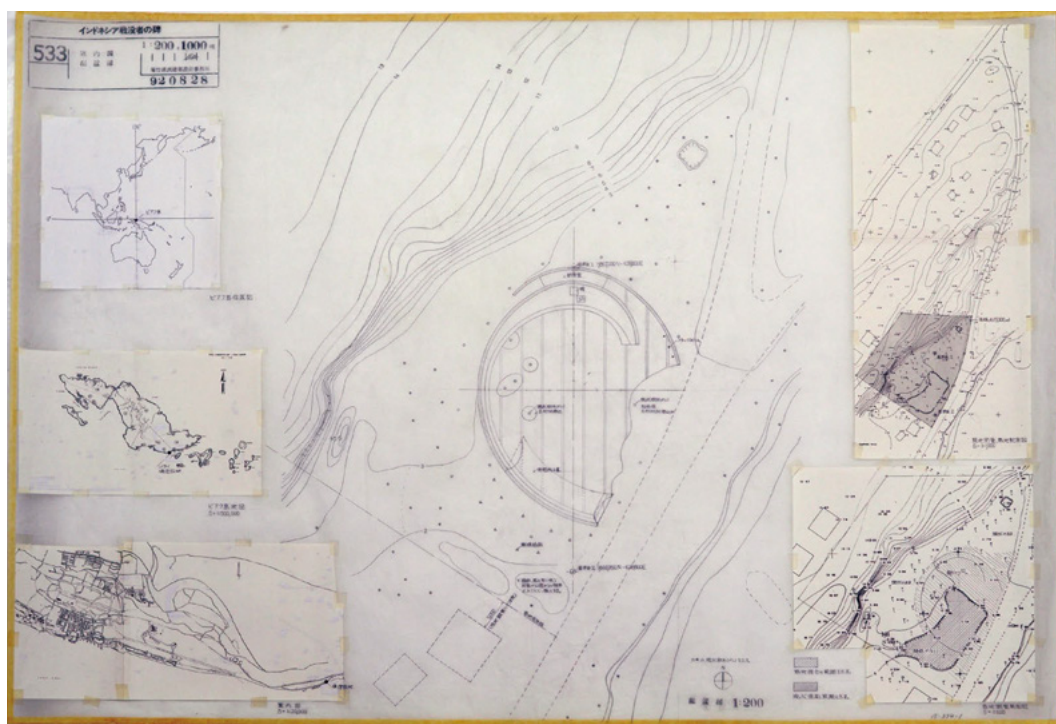


図6 15-374-1

に竣工した《第二次世界大戦慰霊碑》(1994年3月24日竣工)と《インド平和記念碑》(1994年3月25日竣工)では、前者が三つのファイルからなる資料56点(15-374, 375, 379)、後者がふたつのファイルからなる資料18点(15-376, 15-405)で構成されている。前者については、慰霊碑や全体の遺配置図(図6: 15-374-1)だけでなく、納骨像、休憩所、碑文の取り付け詳細などまで、広場を取り巻く一式の図面が残されている。一方で、後者も点数は多くないものの一通りの図面を揃えており、その計画について知ることができる。後期の仕事においては、途中のエスキスにかかる資料が少ない傾向にある。同じくロシア連邦にて実現したふたつの慰霊碑、ハバロフスクに実現した《日本人死亡者慰霊碑》(1995年7月31日竣工)と、サハリンに実現した《樺太・千島戦没者慰霊碑》(1996年11月1日竣工)は、前者がふたつのファイルからなる資料51点、後者が1ファイル14点の資料で構成されている。これも後者については点数が少ないものの、実施設計図から詳細図、伏図・軸組図を含む。

4. 今後の課題

4.1. 全体の傾向

11基のうちの一つ、昭和60(1985)年建立の《西太平洋戦没者の碑》(パラオ共和国ペリリュー州ペリリュー島)に

ついては本資料群には含まれていない。推察するに《西太平洋戦没者の碑》についてはとりわけ別置して保管されていたなど、寄贈者の手元に残っている可能性が考えられる。今後の追跡調査が待たれる。

また、それ以外にも詳細不明の資料がある。資料番号15-521の図面群には、「フィリピンクラーク地区 戦没者慰霊碑 REST HOUSE」(図9: 15-521-6)というタイトルの図面1点が確認される。フィリピンに建立された政府建立慰霊碑としては谷口吉郎設計の《比島戦没者の碑》(1973, ラグナ州カリラヤ)が知られるが、クラーク地区はそれとは異なる地域である。プロジェクト名称が記載されている図面は同じ図面筒の中ではこれ一点だけであり、それ以外には敷地面積2分の1エーカーに計画された慰霊碑の配置図・平面図・断面図・立面図を含む「一般図」が5点確認されるとともに、敷地面積6エーカーに計画された異なる意匠の慰霊碑の図面が3点確認されている。後者についてはNAMA 番号15-364の資料にも、透視図2点、平面図・立面図2点、配置図1点が確認される。これら二つの計画と「フィリピンクラーク地区 戦没者慰霊碑」の関係についても、今後調査が必要である。

本資料を構成するのは主として図面群だが、慰霊碑および慰霊空間は、施設としての社会的な、また歴史的な性格上、意匠や空間構成の観点だけでなく、建設の経

緯や、現地における施設計画、またその後の維持管理などについても考察する必要があるだろう。そのため、これらの事業に係る文書資料についても精査することが望まれる。従来、建築資料は意匠の観点、またその展示価値から図面を中心とした図像資料に関心を傾けていたきらいがある。今後は、より多様な資料へと広く視野を開くことが、社会の中での建築の役割を理解する上で必要となるだろう。

参考文献

- 1 「PACIFIC PEACE MONUMENT 1980–1987 太平洋平和記念碑」『菊竹清訓作品集 2』求龍堂, 1990
- 2 遠藤勝勲, 山崎一彦, 市居博, 古賀繁雄, みぞぶちかずま「菊竹清訓と11の戦没者慰霊碑」日本建築学会『建築雑誌』1700号, 2017年7月号

謝辞

本報告執筆に際して、菊竹清訓建築設計資料の寄贈者であるスミス睦子氏、菊竹雪氏、菊竹三訓氏には、本図面資料のほかにも関連する資料の閲覧の機会をいただきました。また菊竹清訓建築設計事務所の元所員である鹿田健一朗氏、塚本二郎氏には資料調査においてご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

本報告はJSPS科研費 JP17K06758の助成を受けたものです。
This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP17K06758

(2022年5月11日原稿受理)